# ５つの力を育むための環境による保育：ウコッケイの飼育活動を通して
# －TEM図を用いた分析結果から－

広島大学附属幼稚園

## １．活動概要

本園は「豊かな自然や友達とかかわりながら一人一人がその子らしさを発揮し共に育ち合う生活を通して心豊かにたくましく生きる力を育む」という教育目標のもと，広島県が提唱する「感じる・気づく力」「うごく力」「考える力」「やりぬく力」「人とかかわる力」の5つの力によるバランスのとれた生きる力を育み，また豊かな心情・意欲・態度を育むことを教育方針としている。さらに，ユネスコスクールが重点的に取り組む3つの分野とESDの視点（6つの軸と7つの能力・態度）に立った保育を日々実践している。今年度は年長児クラスの子どもたちが，ウコッケイの飼育活動の中で①飼育小屋の建築②人口孵卵からの飼育を行った。

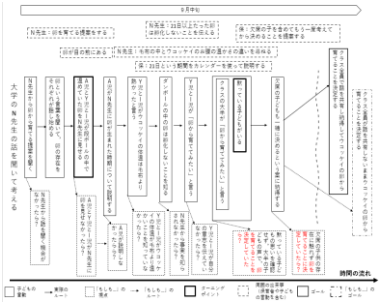
## ２．活動の背景

飼育活動を行う中で，子どもたちは劣化した飼育小屋の隙間に気づき木切れを当てて隙間を埋めていたが，6月に動物が侵入し，オス2羽メス3羽のうち，メスの3羽が亡くなる（うち1羽は繁殖期にオスがメスをおいかけ傷ができたことでの細菌感染）。原因を考えていく中で，飼育小屋作りにクラス全員の意識が向かう。また，専門家からウコッケイの死の原因がイタチであることや，自分たちが数か月間，段ボールの中で温めていた卵がかえらない事実を聞き，人口孵卵（オスを大学にいるメスと一緒にして，卵を産んでもらい，その卵を孵卵器で温めて卵をかえす）を提案されたことをきっかけに孵化に必要な知識を得て，今までの経験と併せながら飼育活動をすすめていくこととなる。

## ３．実践活動の分析・考察について

4月から1月の期間で，本園の環境を通した保育実践の中で，活動場面の一部を取り上げ，複線径路等至性モデリング（以下TEM）を用いて分析を行い，ESDの視点（6つの軸と7つの能力・態度）から考察した。

収集した事例は5事例。事例の対象者は本園の5歳児（そら組）の子どもである。



## ４．子どもの姿と指導の内容

### ①飼育小屋建築

（1）飼育活動での気付きを共有する

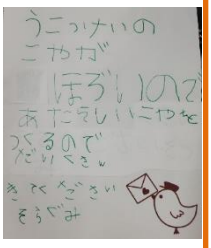
飼育当番による
ウコッケイの
様子の共有

アイデアの共有

・集いでの発表
・絵，文字，写真で共有し，
より良い飼育小屋を構想する
↓
☆地面にトタンかブロック壁を入れて安全な飼育小屋にする
☆繁殖期にメスとオスを分ける場がいる
☆卵を産む場所，ヒヨコを育てる場所を作る

（2）飼育小屋建築の工程を考え，計画する

本を参考にして
考える



どこに依頼するかを
考え，手紙を書く

・本で調べる　・家族に聞く
・グループで考える
↓
☆建築に必要な人（細かい作業が得意な人，大工…），役割り（段取りを計画，作業をリードする人），道具（板，レンガ，のこぎり，金槌，釘…）の共有
☆依頼

（3）協働しながら建築する
（家族・設計士・建築士）

ふれあい広場の
柵の色塗り

繁殖期を想定し，
飼育小屋に
間仕切りを作る

・計画したことを実行する
↓
☆木材磨き，色塗り，コンクリート作りと流し込み，仕切り板の取り付け
☆作業の見学

## ②人口孵卵からの飼育

(1)養鶏場に行き，専門家の話を聞く

・ウコッケイの生態を知る
↓
☆ウコッケイの性格(臆病)，特性(他の鶏との比較から名前の由来・指の本数，冠の形など)を知る。

(2)孵卵器を保育室に設置し観察する

・孵化についての知識を知る
・孵化・孵化直後の様子を観察する
↓
☆孵卵の知識を得る(孵卵器の設置方法，仕組み，孵化までの日数，有精卵と無精卵の見分け方など)
☆卵の観察とその共有

(3)孵化後の飼育を考え実践する

・孵卵後の飼育場についての知識を得る(餌・衛生面)
↓
☆飼育当番活動内容の決定

## 5．活動から得たもの (こどもの気づきと学びから)

### ①飼育小屋の建築

**○協働を体験したことでの子どもの発見**
目的に向かって想像し，計画，実行する中で，さまざまな人が相互に連携していることに気づき，自分達もその一員として役割を担い，達成感を味わった。**(多様性・連携性・他者と協力する力)**

**○設定した活動以外での子どもと保育者の学びとその共有**
見学，茶菓子を運ぶ，一緒に食事を取るなど作業以外での場面において新たな展開が生まれた(大工同士の連携を見ることでの気付きや専門用語に対する疑問の投げかけ，見学の際に，作業への参加の交渉)**(相互性)**

**○子どもと保護者が同じ体験をすることでの保護者の学び**
保護者参加の日を3日設けた。単発的な活動では感じることのできない，建築過程を子どもと保護者が共有したことで家庭で話題となった。また，保護者が子どもの知らない一面を知ることができた。(できないと思っていたことができる・普段かかわりのない人と我が子のかかわりの様子など)
**(多面的・総合的に考える力・コミュニケーションを行う力)**

### ②人口孵卵からの飼育

**○知識の共有**
専門的な立場から効果的な情報提供があったことにより，21～23日経過した卵からはヒヨコは生まれない事実を知り，クラス全員で孵卵器で卵を育てること，ヒヨコの成長を見越した飼育小屋を作る決断をすることができた。
**(責任制・未来像を予測して計画を立てる力)**

**○主体的な子ども集団の生成**
興味・関心の深まりから，孵卵期間に生まれなかった卵の中を想像し，割って確認したい子どもと，見ずに土に埋めたい子どもの意見の対立が生まれた。結果的に生まれる直前で死んでしまったヒヨコに出会い，悲しみを共有し合ったり，どうして生まれてこれなかったのかを考えたりする機会となった。
**(有限性・批判的に考える力)**

**○飼育活動に対する意識の変化**
孵卵後，2か月間保育室で飼育した。クラスの誰もがウコッケイと触れ合うことのできる距離に身を置き，抱いたり，世話をしたりすることで，親しみや愛おしさが生まれ，感情やウコッケイの変化を言葉にし合いながら過ごしたことで，飼育当番活動への意識が変化した。
**(連携性・責任制・他者と協力する力)**

**活動の結果から見えたこと**
1) ウコッケイの飼育小屋作りは，保育者がある程度の活動を想定していたが，実際はウコッケイが死んだことで，専門家と繋がり，予定とは違う新たな活動に子どもたち主導で変化させていった。また，①飼育小屋の建築において，想定していた活動以外で子どもの学びの共有や行動力がみられたり，②人口孵卵からの飼育において，有精卵がかえらないという予期せぬ出来事に対して，物事を批判的に考えようとする表れや実行力がみられた。これらのことから，保育者が設定した活動ではなく，それ以外の余白部分において，自分達で心を動かして学ぼうとする姿が多くあることが分かった。
2) ①②の両方の活動において，経験を誰かと共有する場があった。共有する場があることが，さまざまな出来事を自分事として捉え，主体的に活動しようとするきっかけになっていることが分かった。

## 7．保育者の振り返り・課題

日常の園生活やそこでの人間関係の中に，新たな価値観をもつ人が入ったことで，子どもの“知りたい”“誰かに伝えたい”“仲間と共有したい”という思いや，目的に向かってクラス全員が楽しむ姿を見た。幼児教育を園内で完結させるのではなく，幼児期にさまざまな人との出会いを保障することで，将来，いろんな人と協働して世界の様々な問題に対し，共に解決していくという感覚を体感していけるのではないかと感じた。

かえらなかった卵の中は・・・
いのちにふれる